

富田一樹／咲くやこの花インタビューvol.13

富田一樹(とみた・かずき)【平成 29 年度 音楽部門[パイプオルガン]】



2016 年 12 月放映の MBS ドキュメンタリー番組「情熱大陸」を見て、その存在を知った人も少なくないはず。その年のドイツ、ライプツィヒで開かれた「第 20 回バッハ国際コンクール」のオルガン部門で邦人初の第 1 位となる快挙を成し遂げた富田一樹さん。アンサンブルシータと阪神古楽倶楽部の通奏低音奏者、編曲家、指揮者としても活躍する、若き国際的オルガニストです。大阪音楽大学オルガン専攻を首席で卒業。翌年、同大学音楽専攻科オルガン専攻を修了。その後、ドイツ・リューベック音楽大学大学院へ進学、オルガン科修士課程を最高得点で修了。2017 年夏、ドイツから帰国。同年 12 月、平成 29 年度「咲くやこの花賞」を受賞されました。クラシック好きな母親の影響で早くから 18 世紀ドイツを代表する作曲家ヨハン・ゼバスティアン・バッハに傾倒。中学生の頃、バッハ音楽を奏でるパイプオルガンの音色に魅了されたことが、オルガニストとしての原点です。「アコースティックでありながら非常にデジタルな楽器」「一生涯やめることはない」というパイプオルガンの魅力やこれからについて、富田さんにお話を伺いました。

◎取材・文・撮影＝石橋法子

「音色を聴いた瞬間、自分の中に目覚めるものがありました」

今春、大阪国際交流センターで約 700 人の一般招待客が見守るなか、29 年度「咲くやこの花賞」の贈呈式が開催されました。

たくさんの方の前でパイプオルガンというマイナーな楽器をご紹介させていただいたので、すごく嬉しかったです。母校の大阪音楽大学の先生方がよく受賞されていたので、賞の存在は学生の頃から知っていました。まさか自分が受賞できるなんて思ってもみませんでした。



大阪文化の担い手に贈られる賞ですが、ご自身で「関西人やな～」と感じる瞬間はありますか。

「お前のバッハは醤油味や」と言われたことがあります。濃いという意味だと思うのですが、実際少し粘っこく弾くんですよ。食事も含めて濃い目の味付けが好きですし、そういう部分とも繋がっているのかもしれませんが（笑）。

ユニークなエピソードです。

もちろんテンポが速ければ演奏も軽快になりますし、その曲が持つリズムや雰囲気によっても演奏は変わります。ただ、古い音楽の場合、色々と感じ取ったものを演奏でお伝えしたいと思うので、薄味よりは深みのある味わいになりますね。「じっくり聴いてると酔う」と言われたこともありました（笑）。バランスとしては少し濃い方へ突出したタイプの音楽家なんだろうと思います。

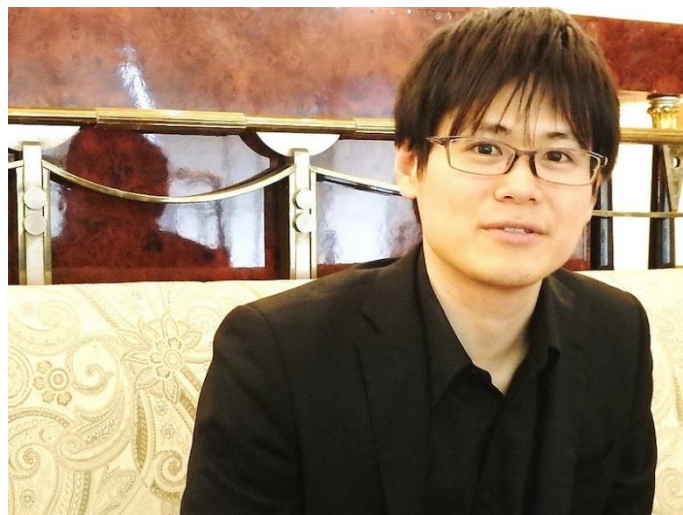
演奏者として音楽と関わるのは9才から。まずはピアノから入られたそうですね。

小さい頃から音楽が好きで、漠然と音楽家になるのが夢でした。だったら「ピアノぐらいは弾けないと」と母親に言われ、ピアノを始めました。これが難しかった。小学4年生ぐらいから習い始めたので、学校にはすでに3、4歳から始めてバリバリに弾ける人たちが何人かいるわけです。自分がピアノで上を目指すことは無理だな、と思いました。

その後、中学へ進学。たまたまバッハの音楽CDに収録されたパイプオルガンの演奏を耳にしたことで、転機が訪れます。

音色を聴いた瞬間、自分の中に目覚めるものがありました。一目惚れのような感覚でした。そこから「この楽器は面白そうだ」と興味を持つようになり、中学2年生の終わり頃から練習を始めました。

ピアノは「難しい」と感じた冨田少年が、オルガンを続けられた理由とは。



オルガンも難しい楽器だと思います。でも僕の場合、素晴らしいハーモニーを奏でる楽器の面白さに惹かれたのと、当時バッハが大好きで、彼の音楽がどういう構造になっているのかを知りたかった。色々と研究を始めた時期でもあり、大変さよりも「この曲が弾けるようになりたい！」という興味の方が強かったですね。また、弾くまで分かりませんでしたが、同じ鍵盤とはいえピアノとオルガンでは構造的にもかなり違う楽器でした。

具体的には？

例えば持続音。ピアノは足元にあるダンパペダルの操作で音を伸ばしたり、音響を膨らませることができますが、オルガンは鍵盤を離すまで、ずっと音が鳴り続けている。鳴るか鳴らないか、1か0かの世界なの

で。強く叩こうが弱く叩こうが、音色に変化はあまりありません。そのため「どうやって表現するの？」と思うような楽器だと思います。

実際、どのように表現するのですか？

この四分音符は 100%伸ばすのか、90%にするのか。また、この二分音符は 100%伸ばすのか、それとも 50%で切るのかとか。音の長さを数値化することで曲に表情をつけていきます。アコースティックだけど発想は非常にデジタル。昔のシンセサイザーのようなものだと思います。

幻想的なハーモニーは緻密な計算のもとに成り立っていたのですね。楽器などへの興味から、進路は迷わず音楽大学に？

高校時代は、そこまで先を見据えていたわけではなく、「この曲が弾けたら満足」ぐらいの心境だったと思います。続けられたのは、オルガンという楽器に触れていたいという気持ちがずっとあって、やめるという発想がどうしても出てこなかった。「楽しくてやめられなくなった」というのが本当のところ。なので、結局大阪音楽大学へ進学するのですが、大学生になってからも、自分がプロになれるとは思ってもみませんでした。



純粋に、好きなことに没頭していた時期なのですね。

大学では別の楽器を専攻している仲間との出会いもあり、アンサンブルの楽しさも知りました。また、入学当初はコンピューター音楽の面白さに目覚めたこともあり、オルガンを弾かずに没頭していた時期もありました。例えば、先ほどの「四分音符を何%伸ばすか」という話も、DTM というコンピューター音楽の世界では、実際に音符の長さを数値で表すことができます。仮に四分音符を 480 に設定すると、八分音符は半

分の 240 と表記できる。そういう正確性に面白味を感じていました。音を数値化するなど、コンピューター音楽で勉強したことは、パイプオルガンを演奏する際にも大いに役立ちました。

「ドイツでは留学だけは物足りず、別の結果を残したかった」

大阪音楽大学および専攻科を経て、その後はドイツの大学院へ留学されます。

きっかけは、卒業後に行った初めてのドイツ旅行でした。その時は、パイプオルガンを聴くツアーに参加したのですが、現地で聴いたオルガンの音色が素晴らしく、「ヨーロッパにはこんなに良いオルガンがあるんだ！」と、かなりの衝撃を受けました。そこから留学を考え始めて、2014 年にまず語学留学でドイツに入り、翌年ドイツ・リューベック音楽大学大学院に入学しました。いま思うと楽器の構造など、日本ではドイツで経験したこと以上に満足いく勉強はできなかつただろうなと思います。当初は海外にも留学にも全く興味はありませんでしたが、行って良かったなと思います。

ドイツ・リューベック音楽大学大学院在学中の 2016 年には、ライブツィヒ第 20 回バッハ国際コンクールのオルガン部門に挑戦されます。



コンクールは前年に先生から勧められ、挑戦することにしました。というのも、せっかくドイツまで来たのに、ただ「留学しました」だけでは物足りないと感じていたので、何か別の結果を残したかった。そもそも日本ではオルガンのコンクール自体 1 つしかないですし、その東京の国際コンクールもプロがめざすような

場で、学生上がりが太刀打ちできるようなレベルではなかった。そんな中、今自分はドイツにいてコンクールを受けられるチャンスがあるなら、「やるしかない！」と思いました。

結果、日本人初となる第1位、および聴衆賞のダブル受賞という快挙を成し遂げました。

もちろん嬉しかったのですが、まず本番までの準備が大変でした。課題曲は量が膨大で、その上「どう解釈すればいいの!？」と戸惑うほどの難曲ばかり。ただ、ひとつ自信があったのは、僕は中学生の頃からバッハに傾倒していたので、彼の音楽の構造や仕組みをある程度論理付けて語ることができました。そこは、他の方よりも知識や経験の上で勝っていたと思います。優勝が決まった瞬間は嬉しさより疲れがどつと出てしまい、取材中も「早くホテルの部屋で休みたい」と心の中で思っていました(笑)。

作曲家の意図を解釈するために、具体的にはどんな作業が必要ですか。

例えばハーモニーとしては調和がとれているのに、あえてフラットやシャープが書かれているのはなぜなのか。そういう疑問点から、作曲家の意図を紐解いていきます。面白いのは、現在出回っている楽譜とバッハが書いた当時の譜面とでは、かなり表記に違いがあるんです。演奏者はそれを当時のものに正して弾かなければならない。僕も大学のマスタークラスを受講したことがあるのですが、バッハコンクールのオルガン部門の審査委員長を務めるミヒャエル・ラドウスクは、その辺りの知識に非常に詳しいので、「この演奏者は、この音を直していない」とか、すぐにバレる。コンクールなどでは演奏者が「どこまで深く楽曲を研究しているか」も審査の対象になるわけです。

富田さんが「作曲家の世界観を読み解く技術に長けている」と評価されるのも納得です。



どこまで本当に世界観を表現できているのかは分かりませんが、少なくともバッハが記した音一つひとつの意味に関しては、他の方より理解している自信があります。だからこそ、思いきった演奏ができるのかもしれない。他にも、讃美歌の編曲では歌詞からインスピレーションを得たり、当時の楽器を知ることで得られるインスピレーションもあります。当時の楽器も構造的には今の楽器とは、かなり違います。鍵盤の数や音域も違うので、古い音楽に関しては、今の譜面と楽器で頑張っただけ練習していても、分からないことの方が多いかもしれません。

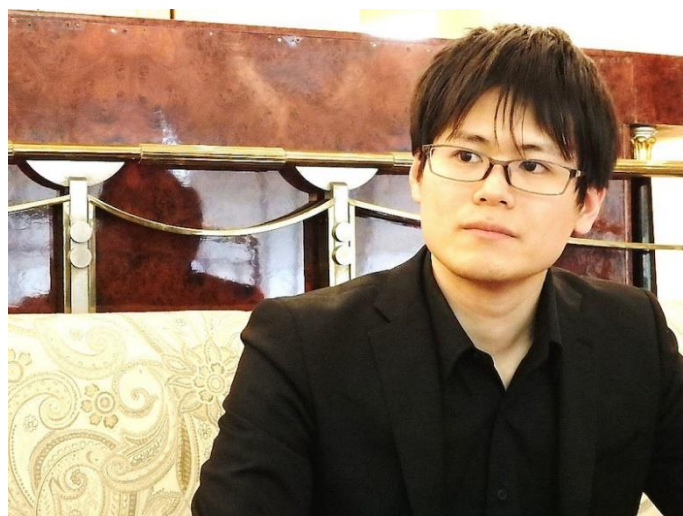
研究、練習、本番では、どの工程が一番好きですか？

僕は自分の演奏をよく動画サイトにアップするのですが、撮影した自分の演奏動画を観客として見る瞬間が一番幸せです。やっぱり、納得のいく演奏ができたときは、自分でも「上手く弾けてるな〜」と思うので。それくらい、自信を持って提供しないとダメだということです(笑)。客観的に映像を見直すことで気づかなかった癖や欠点を発見したり、演奏のクオリティを上げる面でも、勉強になることが多いですね。

「演奏では、ガンダムのコックピットに入るような感覚です(笑)」

譜面を掘り下げることは、バッハの人生を生き直すような作業だったと思います。改めてバッハ音楽の魅力とは？

バッハの音楽ほどドラマティックなものはありません。少なからず彼の人生は音楽に反映されていると思います。僕が知る範囲でいえば、小さいころに両親を亡くしたことで、大学進学を諦め就職を余儀なくされました。バッハは2度結婚しますが、最初の妻とは早くに死別。十数人いた子供たちも半数は幼い頃に亡くしています。そして、晩年のバッハは視力を失います。当時は医療面の問題もあり、それが当たり前だった部分もあると思うのですが、死に対する意識は現代人よりも強かったと思います。



彼の音楽がそうであったようにバッハ自身、神に向き合う時間が多かったのかもしれません。

譜面を見る限り、敬虔なクリスチャンであったとしたいと思います。ただ、信仰の深さと音楽家としての才能は比例するものではありません。作曲はテクニックの問題なので。若い頃のバッハはよくケンカもしていた、という資料もあります。当時、教会での演奏にはプロの楽団ではなく、教会学校に通う生徒が担当することも多く、必ずしもバッハが納得のいく演奏ばかりではなかったようです。そういう意味でも、現在 CD で聴くような完璧な演奏は理想であって、バッハが生きた時代に譜面通りの音楽が再現されていたかは、また別の話です。

当時、完璧な音色はバッハの中だけに流れるものだったのかもしれないですね。



また、バッハは時々ですが鍵盤楽器では再現不能な譜面も書いています。一人では物理的に手が届かないようなコードとか。つまりそれは、実際に弾くことを想定したものではなく、「頭の中で楽しめよ」という、かなり上級者向けの音楽だったと思います。ひとつのメロディーの中で「こんなことまでできるぞ！」という。音楽的というよりは、テクニック的にすごいもの。それが、当時の作曲家の力量をはかるひとつのバロメーターでもありました。

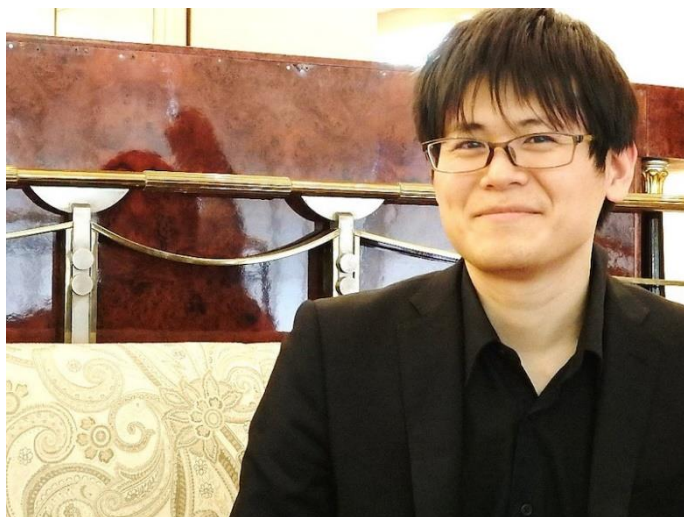
“音楽の父”と称されるバッハは、富田さんにとってはどんな存在ですか。

僕にとっては一番尊敬する音楽家のひとりです。教育面でも彼がたくさんの譜面を残してくれたことで、今の時代に僕らが勉強できるわけで。色んなことを学びました。目指しても到底到達できない領域にいる「伝説の人」。だけど、「やっぱり同じ人間だったんだな」と思える一面もあるんです。とくに若い頃に失敗作のような曲も残っていて、それを見るとバッハも最初はつたなく、一つひとつ学んで成長していったんだな、と分かる。そう考えると、親近感が沸きますよね。

また、パイプオルガンは両手両足を駆使し、無数のパイプを開閉することで“一人オーケストラ”のようなシンフォニーを奏でられるのが特徴です。パイプの数は、教会にある大オルガンで数千本、ピアノのようにコンパクトなタイプでも数百本を数えます。バッハの時代は巨大なふいごを動かし、人力でパイプに風を送っていたそうですね。

パイプオルガンは、パイプに風を送ることで音を奏でるので、演奏には風量が重要になってきます。僕らはふいごの部分をオルガンの「肺」と呼ぶのですが、人力の時代には風を送るのが上手い人、下手な人がいたようです。「さぼるなよ」または「今から演奏するよ」という意味で、鍵盤の近くには裏方に通じる合図用のベルがある楽器も。こちら側の紐をひっぱると、現場のベルが鳴るという仕組み。古いオルガンには今でもついていることがあります。

当時としてはロボット級の仕組みと大きさですよ。教会では演奏者も表に出ない事が多く、裏方として操作していました。



教会の大オルガンは礼拝のための伴奏が目的なので、オルガニストを見るための楽器ではないんですね。僕のコンサートでは、演奏風景をカメラで生中継して、映像とともに演奏を楽しんでいただいたこともあります。映像では普段なかなか見られない足の動きまで映し出すことができるので、好評でした。しかし、

あれだけの技術と発想で作られたパイプオルガンは人類の叡知ですよ。ある意味巨大な機械なので、演奏の際は本当に、ガンダムのような巨大ロボットのcockpitに入るような感覚です(笑)。

(笑)。パイプオルガンの演奏会では、どんなところを楽しんでいただきたいですか。

パイプオルガンにはたくさんのパイプがあって、その組み合わせにより様々な音色が出せます。コンサートでは「こんなにもたくさんの音色が出せるんだよ」というところを楽しんで欲しい。なるべく多彩な音色で、飽きさせない演奏をしたいなと思っています。

最後に、今後の目標をお聞かせください。

引き続き、国内外で古いバロック音楽を紹介していきたいのと、いずれ時が来たらオーケストラを立ち上げたいなと思っています。自分はオルガニストとして演奏したり、時には指揮をしたり。ただ、僕の指揮は「固すぎる」とよく言われます。そこまでテキパキと細かく指示を出さなくても分かるよと。本来、正確な打点を伝えるのはコンサートマスターの役割なのですが、「イキイキとしたい音楽を作りたい!」と思うと、つい指揮者の領域を越えて指示してしまう。プロの指揮者からみたらそれは論外ですよ。でも、癖なんです(笑)。

★大阪名物を訊く!【私の、咲くやこの花賞】……

最近、新世界の串カツにはまっています。友達に誘われて、よく一緒に食べに行きます。高くて旨い、安くて不味いのは当たり前。その中で、安くて旨いものが食える世界っていいですよ(笑)。新世界に限らず、それを求めてもいいのが大阪だと思うので、今は串カツです!

